

沼尻桂一郎編輯
西南太平記

十三号

上



10

15

20

25

30

A434
15

沼尻絰一郎編輯全二冊

西南太平記

東京

萬笈閣發兌

達甲第十四號

教導團步兵科並二喇以生徒志願ノ者ハ撰拔
入學差許候段昨九年達第一百號ヲ以テ
相達置候處更ニ騎砲工兵科生徒モ召募候
條右布達ニ照準シ志願ノ者ハ入學願書
教導團へ可差出此旨相達候事

明治十年五月一日

陸軍卿山縣有明代理

陸軍少將井田讓

西南太平記

十二編上二一

48-7798

台ぞうさき
華族方恭
内とて従軍
小盡力也





西南太平洋

十二編上

三



西南太平洋

九徒の近頃通券を製して沿道の人民に與へたり其大さ大抵
 官の十錢札位より紙の粗末なる白地あり生々見たるの五十四
 位までありし其形左の如し

朱印

證書番號何々

朱印

金何圓

承惠社

朱印

明治十年四月

朱印

此朱印の内に承惠社之印の
 五字あり

此表借金返辨に付てハ撫育
 承惠兩社 合金三 七千百五十
 圓を以て 月々返辨可申且亦
 大坂へ通商金融調ひ候上ハ
 多少を不間引換可申者也

此角印の内朱字あり
 金何圓の文字あり

西南太平記十二編卷之上

東京 沼尻絰一郎編輯

第廿三回

諸縣の從軍征討ハ憤發す
 并官軍鹿兒島縣下に大激戰

維新以來其復古の盛業を翼賛せる功勲を負
 んで他の士族ハ異なる特典を得んと欲せり
 又往々鹿兒島縣舊藩士のとを以て一他縣人の
 来つて其の廳ハ臨む事と許さず或ハ曰く今

回貴島清の西郷黨の組せず総軍出陣の後
みく兼て逆徒の應ぜざる城郷の士族を募
りたるものよして豊後路より逆軍の背後を攻
撃するの術あらんと又西郷大將の北岡の
本營より出張し熊本と去る事一里半を過
るところにて或る温泉の浴し或る圍碁師俳
人茶人等を集り専ら風流を事とせざるの戦
機餘り有ると示すものよ似たり西郷隆盛の人

吉小本營を移し居るらん方今日夜軍議と
起す小鹿兒島人と熊本人との議論が合はざ
るとの説あり既又熊本城下を引拂ふ時も熊
本人の此の城下ふないし必死の戦争とみさん
と云ひ又鹿兒島人の退いて要地を因り更に
官軍を悩さんといひ遂ひ此の議論を決
したり

編者云ふ西郷自ら大元帥と稱したる

既^す漢^{かん}の韓^{かん}信^{しん}初^{はつ}ト^り漢^{かん}帝^{てい}兵^{へい}を率^{ひき}て
都^{みやこ}を打^{うち}立^{たち}く^る時^{とき}韓^{かん}信^{しん}の病^{やまひ}と稱^{いふ}く
從^{したが}せず猶^{なほ}留^{とま}りて閑^{ひま}居^まりけるが其^{その}の後^ご陳^{ちん}
豨^しが曲^{まが}陽^{やう}の陣^{ちん}を取^とりたるよりと傳^{つた}へ
ま^まろのうち^{うち}に思^{おも}ふやう陳^{ちん}豨^し邯^{かん}鄲^{たん}に屯^{とん}
して漳^{しやう}河^かを阻^さるときの是^{これ}上^{じやう}の策^{さく}あり圖^ず
らざるふ今^{いま}曲^{まが}陽^{やう}に屯^{とん}す帝^{てい}若^{わか}し邯^{かん}鄲^{たん}に
據^よりたまふ陳^{ちん}豨^しが敗^{やぶ}らん豈^{いか}疑^{うたが}いありと

と急^{きゆう}に密^{みつ}書^{しよ}を調^{しら}へ早^{はや}く勢^{せき}を分^わけて小^{せう}路^ろ
より直^{ちゆう}に長^{ちやう}安^{あん}を攻^{せう}め我^{われ}却^{くつ}て中^{ちゆう}より起^{おこ}
り帝^{てい}として首^{しゆ}尾^び相^{あひ}顧^{かへり}する事^{こと}能^{あた}はざらじめ
ん必^{かなら}ず打^{うち}ち勝^{かつ}つべしと書^かて陰^{いん}に心^{しん}腹^{ふく}の
人^{ひと}に持^もせ陳^{ちん}豨^しが方^{かた}へ送^{おく}りける其人^{そのひと}命^{いのち}を
受^うけて出^いけるふ韓^{かん}信^{しん}が從^{けい}僕^{ふく}に謝^{しゃ}公^{こう}著^{ちゆう}と云^い
ふりのありしが遠^{とほ}く出^いて別^{わか}れを送^{おく}り二人^{ふたり}酒^{さけ}
を飲^のんで大^{おほ}に醉^{よめ}ふ一日^{ひとひ}暮^{くれ}に帰^{かへ}りしか

を大元帥怒て汝も事有りて早朝より出て遅く歸りたる甚ど以て心得がと一と云ひけるよ謝公著此の時酒未と醒ざりかば大元帥周章して我れ曾つて外國内通したる事一何と心得がた一の宜ふぞと云ひけれを大元帥甚ど驚き左右命して謝公著を扶て退き一り心の中此の者すてよ我が機密を知

りぬまば生いて置がと一と謝公著の密み門を開ひて走り出す城外又出んと心よおりの様の大元帥僕從甚ど多けれを若一我が逃去たるを聞バ手分して追ひまむべ一密に相國蕭何又此機密を告んと丞相府を指して馳行きたりと韓信さ一もみ知謀ふりき良將なれども尚も心を決する度能つば諸人の言を聞て蕭何の定



て能く此の事を知らん心す詐りありのべか
らず帝朝に還りたまりて決して封爵を賜
るべしと思ひ終に諸人と約を定めまこと
陳豨に勸めて謀叛せしめ密に書簡を送
りて彼に長安を攻させ汝却て内應せん
との圖りけりあり西郷も知謀いかなる
ものなりしや又日向の高千穂に赴きしとあ
りつるあり

逆徒の矢部木山邊まで引退ぎ壘と築きて
大に戦ひしが木山近傍の暴徒を追々拂攘せ
らるるあり官軍矢吹秀一と始りて熊本縣下
へ来集せしむに餘程の兵数に立至りたり
加るる常備兵第一後備軍勢の辛未の年ふ
解隊せし壯兵等新手の兵の到着するの
多き中に大坂より来るところの遊撃隊別
手組と云ふ一隊あり是の悉く撃劔長ト

たる者もて人員百九十人をりりみこ手詰の
 戦ひふの抜刀を以て斬り込せん為め召募せ
 られたる英雄もて世の開化不赴くといへども
 日本刀の切味ハ何か昔より劣るべき覚えの
 腕もて暴徒の首よ之れと試んと思ひ込たる
 景色に或ハ洋服の下は鎖帷子と着或ハ
 筋鐵入りの鉢巻をまゝたる十年前の戦争
 後ハ絶て無り軍粧もて軍機いりよと待ち

たるハ最も目新らに從軍多りと
 亦陸軍教導團士官學校の生徒より陸軍中尉
 小拜命さま一木村氏ハ九州へ出發せしむ
 穂田縣士族跡部辰蔵が從軍願ひと名とし
 不軌と謀り顛末と聞ふ同人ハ明治三年
 中秋田藩の士族初岡敬治等の不軌と謀り
 に與し遂に捕縛され同四年に放免され處
 々流浪し常不因循論を發して居たり折

西郷大平言
から西郷黨の兵と挙げると聞き是こそ國體
挽回する好機會なれど黨與も兵器も何
ぞれを從軍に托して同志と募りたるは官廳
及び士民の信仰も得名正しく且兵器も得易う
んと過る三月十九日同縣士族山島久剛此人此拳
動不聞らず
と連署して同志百三名を募りさゆ忠義らしく
征討從軍願ひを縣廳に出せしめ同二十二日願
ひの趣き其筋を上申のうへ何分の指揮およぶ

べくとの指令となりたるより夫も口實と為し
屢同志を集め或は暴論を吐或は西郷を賞讃し
同腹の者と探り同二十五日川邊郡新屋村の桑
畑に集會し言て曰く西郷は國家の功臣なり
今度事と挙げたるを定て朝廷の為め多るべし
各位もも朝廷の御為めさへなる事なれば假
令西郷も與するも誰も黨まるも妨げらるま
次第多しや御心底を如何と言出したる

小各即答もよく先その場の退き一が同二十六日
 に至り又々集會一前説ふ異ざる更と主張を
 るは皆曰く如何なる更なりとも朝廷の御為
 とあらを死を以て報ずるの本意ありと答へ
 一かを然らる爰又契約すべしと連判帳を認
 めて各血を注ぎたるが猶も疑ひ一層聲を励
 一各血判せしうへは是より直に縣廳と襲はん
 と云ふよぞ一同吃驚一面色を失ふひけれむ

斯る奴原ふての所詮頼よりぬと彼の連判帳
 の其場は焼棄たるがその後ち四五日過て同志
 の内ふて口外せしふや誰云ふとなく跡部等の
 暴拳と企るとの風説あれむ今に包むは術な
 一と四月五日自首の歎願書と出せしが是と
 聞より我もくとその黨類の者どもが自首し
 たる者の比木林左右造、島勘七、藤田小六、小泉
 清助、差我喜惣治、安藤忠吉、東海林兵之助



秋田縣の
士族等陰謀
頭をも自
首する



福川鐵三郎、佐藤忠吉、中島八五郎、佐藤大
助、服部春政、福川軍平、安藤準之助、手嶋小太
郎、土岐良助、佐々木政五郎、等の十七人あり
しと又舊因州鳥取藩の士族川田景興の征
討從軍と願ひ六百人程ふて既ふ出發せん
とせし前二百人ふど俄に何方へも消失せ
しに依り舊藩主池田慶徳公の同二十四
日急み西京より同地へ赴りれ長野縣下松

本の士族関口糾、同要右衛門、正木勝、関間三
太郎、多湖八彌、等の五名の今般の乱に乗ト
容易らざる陰謀と企てしより去る三
月二十四五日ごろ捕縛されその他市在の平
民十三四名も同日縛せられしが此同類
に今に行衛知れざるもの、松本の文明堂中
村氏多井村の帰農僧等ありと云
又五月二日別の別働隊第三旅團ハミ十侯迄

進軍一第四旅團も此の日海路鹿見嶋に向
 て出帆一此手上陸せば肥後路の官軍も平押
 みて海陸兩道より攻撃するの軍略なり
 然るに大口よ屯集する逆兵の蒲生も千餘
 人其他鹿見島近傍小山田伊敷嶽村田上村
 邊に逆兵二千入押出ー又加治木國分敷根
 福山をよも多人数繰込と同五日の曉ふの
 逆軍其勢凡三千人計り伊敷より谷山の方に

繰り出たり又鹿見島縣下へ帰国して遂に同
 日午前八時頃開戦一其以来諸方よ出沒あり
 縣下の官軍と戦ひ郷土を専有せんとするの
 意とつんぬれど官兵の入縣以来舊城の山を據
 つて砲壘を築き哨兵を出して逆情を探る
 り銳氣を養つて待とも知らず同日の朝の開
 戦よまご明果ぬ程よりして城山近く押寄一
 と官兵の疾知りたれば互に互に近寄り追

ひ決して發砲をべり〜と静まりかへつて窺
ひ居る我備へ無き目覚ぬゆのり〜業内
知りたる更も又〜と山上まで押寄せ
砲壘近く結ひまへせ竹柵是へ切込を防く為
又取付て打破らんと揺り動うすを何者る
ぞと答むれば逆兵へ大声おて我こそ大将西郷
隆盛よりといりせも果す待設けたる小銃の筒
先揃へて發射せば逆徒の忽ち打倒さきて即

死に僅三人ありと其中一人西郷の影武者と討
取大小の負傷數を知らずといふ此後屢々道と
替て此城山を抜んとされど未だ砲壘の設けゆ
るに唯押寄ての攻撃のそみて肥後地方も天嶮
と要一守兵とありて眼下又官兵を防ぎといふ主
客の勢ひ同トか〜毎戦敗れて退くも又謂れ
多きふあ〜ざるべ〜曩も熊本戦ひ中逆將桐
野が西郷の本陣へ援兵を請ひ〜といふ更疾く



西高六三巴

十一編上
十七



城山の砲
聖の西郷
の影武者
と討とる

西高六三巴

聞えたる西郷の陣詰ひしに、何れぞして本
國へ通ぜしと、其書の趣、左の如し

本日黒木直右衛門到着當地へ出張候就て、
熊本攻城ふ付て、兵隊も四方に手配り昨日
より本日迄も當岩村の内、永野原と申と
まろよ、戦争最中殊に諸道口々も同断
夫も兵員不足に付願、いへ本地強力の
兵と御組立みて、貴島宇太郎連中より

一千位も御指遣しに相成候ても、差支へ
間敷候間、其儀に於て、山鹿滞陣私指向け
至急御出兵御賢慮有之間敷哉、一日あり
とも至急御繰出し、被下候方幸の事に候間
宜敷御依頼申上候、且弾薬乏しく候へば、兵
力に相拘り申候間、晝夜御製造輸送方御
依頼申上候、不取敢、兩様至急御取斗可被
下候也

正徳元年三月

山鹿澤陣

明治十年三月

桐野信作

大山格之助様

又五月五日午後七時頃より鹿兒島ソニタイロ
キヨリ一大隊程切込の令と共に進来り暫時は
して打拂ひ隊長能勢彌九郎と打取り其外
三十四名の死傷あり官軍の兵卒一人即死二
人傷を受けたり午後九時頃より小ぜり合ひあり

市中の哨兵線内の外同日午前よりして故火鎮
定せずとら同六日石炭欠乏候ふ付積入の為
馬関の港へ回艦す飲肥高鍋の者の追々脱走し
て回る有りといふ又鹿兒島廣小路の小松郎を
本營と一松山通り重久郎と第一旅團の本營
と一其他学校等の各所と兵營と定め西ハク
ワシガラ橋より海岸に達し北ハ日置通りより
招二龜社城山東ハ練兵場の南北の道と境と一

西南大正巳

十二編上

て旧城下の守備全く整へ待とも知らぬ逆兵の五日の未明城山へ襲来て抗撃せると中腹又備へたる大砲と連発し西田川と楯より劇く逆徒と戦て遂に隊將野瀬と斃せば午後十時迄支へ逆徒も力盡て敗走しこづか之坂又引揚しと此砲戦よりつてツムダ西田ナカスと始り上町其他の士民の邸宅三分の二は焦土と為りしと同日八代口ハ黒川大佐の兵卒石坂又大激戦一時間程みて兇徒と追撃

其夜小川路に進む積り又川路少將の隊へ當日二中隊ふて大口に進撃中午前十一時開戦又逆兵走りて俘虜十四名分捕多し官兵即死三名同日午後十一時逆徒と襲来り官兵防衛線の臺場より砲発せし十二時頃逆徒潰散す又伊敷より谷山の方へ出發し兇徒の勢ひ破竹の如く今又攻寄んとする勢は官軍の逆軍来れ目又物見せんと守備を嚴重し相立城の後より山又砲台と築き中腹又柵を設け今や遅しと官

兵へいの勇氣ゆうき凜然りんぜんとして待まちかけたらししと一ひと手をて鹿か児こ
島しまふあり一ひと手の逆軍ぎやくぐんの斯ごとく程ほど又また撃うてや若わかども進すす
めや面々めんめんと逆将ぎやくしやうの真先まゝき又進すすて大旗おほなほを揮ふるて下した
知しる一ひとけるし云いふ

西南太平洋記十二編卷之上 終

010190507721

